

原発事故から15年 原発ゼロと住民本位の復興を

8.30ふくしま集会

8月30日、福島市で「原発ゼロと住民本位の復興を求める ふくしま集会」(主催・原発をなくす全国連絡会、ふくしま復興共同センター)が開かれ、全国から1500人以上が参加しました。

二度と起こさせない

全体集会では、復興共同センターの野木茂雄代表委員が基調報告。原発の現状と避難者の実態を共有し、たかひの展望を語りました。事故も被害も避難も続いている中、国は「原発の最大限活用」

それぞれの立場から

福島県の住民訴訟の原告、果樹農家など各分野から8人が発言。母親連絡会からは、新婦人福島県本部の原発全基廃炉を求める請願が県議会ですべて一致で採択されたあと、残っていた自治体にはた



全体会の舞台



若い世代が舞台いっぱい

セッションで新婦人が報告

全体会にさきがけ、午前中は「復興」「再エネ・省エネ」「全国の運動交流・次世代継承」のテーマ別セッションが開かれました。「復興」では、新婦人福島県本部副会長の村上裕美さんが、復興共同センター・子どもチームとして、福島の子どもの放射能被害から守るための署名や子育て支援策についてのアンケートなど、とりくみを報告。

「運動交流」では、新婦人埼玉・川越支部の吉野陽子さんが、埼玉県本部が教職員組合と共同での福島の親子を埼玉に招くツアーや、支援物資を持って仮設住宅を訪問し交流、毎年の3・11アクションにとりくんでいることなどを紹介。県本部のバスツアーで現地の実態を知った自身の経験を語り、「福島を忘れず原発ゼロと再エネ推進へ行動し続けます」と力をこめました。



発言する吉野さん

島に残るか避難するか、苦渋の決断を強いた原発事故を許せない、それぞれの選択を尊重してほしいと訴えました。どの発言からも、ふるさとや生業を失った悲しみ、理不尽への怒りが伝わります。運動をつなぐ

つなぐ・つながるステージでは、若い世代が登壇。原発事故の被災地フィールドワークから、実際に現場で学びを続けることが大切、「自分たちが継承していく」と語り、会場から大きな拍手が

集会では新婦人福島県本部が現地実行委員を務め、県内外の支部や班、13道府県本部からも賛同が寄せられ、集会を支えました。



1500人が「原発ゼロ」を掲げてアピール

主張

国会前行動のペンライト集会が、またたく間に全国に広がり、新婦人も「全自治体でペンライト行動を」とレッドアクションにとりくんでいます。新婦人の行動を集計すると、レッドアクションをおこなった支部・班は457を超え、自治体数は480以上、アクション数は「毎月開催」「10回以上」など

全国でレッドアクション広がる 声をあげ平和の仲間を

「2650回を超え、全国に支部・班の組織をもつ新婦人ならではの広がりです(8月31日現在)。特徴は3つです。1つは、今の政治にいてもたってもいられない人との「出会い」と、その後押しと

「ふくしま」を感じて共有しています。2つめは、行動が「喜びと元気」になっていること。「国会前には行けないから、地元でやりたい」と、6月から毎月駅前。久しぶりに集会に参加できた」「チラシ

や署名の反応が良くてうれしい」「マイクでスピーチや憲法条文の読み上げもした」などの感想が寄せられています。3つめは、「入会につながっている」ことです。3〜6月のレッドアクションで55人が入会し、その多くが次世代です。『出会いに行く仲間づくり』このキャッチフレーズがお気に入り。そこに必ず出会いがあるから」と、毎月行動している支部の声です。憲法まもるレッドアクション! 「私の街」から、さらに広げましょう。

〈最終回〉

学校とジェンダーの現在地



男性性研究/教育実践家 田中めぐみ

フェミニスト教育学では、教室は知識を伝えるだけの場ではなく、学習者が自分の中に内面化してきた価値観に気づき、それを他者との対話を通して問い直す場だと考えられています。表面的に「調和した教室」を目指すだけでは、「男らしさ」「女らしさ」の規範は見えないまま残ってしまうーそんな指摘に私も深く共感しています。

だから私は、男子校でジェンダーを伝えるとき、生徒の反発や戸惑いを消そうとは思いません。第三者介入の授業では、「女性がどう思っているかわからない」「女性にも男性の痛みを寄り添ってほしい」「怖そうな相手には介入できる気がしない」といった率直な声があがります。その声を受け止め、なぜそう感じるのかを一緒に考えます。「男らしさ」の規範や「恐れ」が言葉になって初めて、対話が始まるからです。

授業の終盤、ある生徒が「共同的バイスタンダーになるのが一番難しい」と話しました。共同的バイスタンダーとは、西井開さんが提唱する、加害者を他者化せず、自らの弱さや恥も開示しながら、ともに変化していくことを目指して長期的に関わる第三者です。そ

6 教室で育まれる「共同的バイスタンダー」

の発言をきっかけに、別の生徒が自分の経験を語り、さらに別の生徒が新しい視点を加えていきました。教師が答えを教えるのではなく、生徒同士の関係そのものが変わっていく瞬間でした。

家に帰れば、私は三歳と十歳の男の子を育てる保護者です。子どもたちを大声という暴力にさらしてしまうこともあります。だからこそ、「どの口が言うてるねん」と、自分が持つ力や支配性を問い返し続けています。私自身もまた、「正しさ」を教える側ではなく、学び続ける一人です。

この連載では、「男らしさ」や感情の言語化について書きました。その先に目指しているのは、誰か



大月書店 2300円+税

『教室から編みだすフェミニズム』 虎岩朋加著

を言い負かすことではなく、互いの揺れを受け止めながら、ともに社会を変えていく関係を育むことです。男子校の教室で育まれた対話が、家庭や地域へと広がり、「共同的バイスタンダー」が一人でも増えていくことを願っています。